様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６３４

研究課題名（和文）ヴァイマール期保守革命論の再検討：「ドイツらしさ」とプロテスタンティズムの関係

研究課題名（英文）Rethinking on the German conservative revolutionary movement: research on the relationship between "the Germanic" and the Protestantism

研究代表者
小柳　敦史（KOYANAGI, Atsushi）

北海学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：６０６３５３０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヴァイマール期ドイツの保守革命的言説とプロテスタンティズムの関係を解明することを目指した。従来、保守革命論は反プロテスタンティズムであったと言われてきたが、両者の間には協力関係があったことが、以下の2点において確認された。1) 1917年の宗教改革400周年記念において、『ターート』誌の著述家たちとリベラルなプロテスタンティズムが、保守的ルター派への反対において一致していた。2) シュペングラーの『西洋の没落』は宗教史学派の研究成果を通俗化したものであった一方で、この著作は1920年代のプロテスタント神学において交わされた「運命」についての議論に決定的な影響を与えた。

研究成果の概要（英文）：This Study sought to clarify the relationship between the discourse of the German conservative revolutionary movement and the German Protestantism in the Weimar era. It is often said that the conservative revolutionary movement had the tendency of the anti-Protestantism. But it was found from the result of my research that there were a quiet partnership between the conservative revolutionary movement and the Protestantism. 1) The writers of “Die Tat” and the liberal Protestant Theologians agreed in the opposition to the conservative Lutheran on the Reformation Jubilee 1917; 2) The results of the research of the history of religions school were popularized in the “The Decline of the West” by Oswald Spengler, whereas the concept of “fate (Schicksal)” of this book influenced the theological argument in 1920’s.

研究分野：近代ドイツ宗教思想史

キーワード：リベラル・プロテスタンティズム　保守革命　シュペングラー　運命　宗教改革記念

１．研究開始当初の背景

2014 年で開戦百周年を迎え、第一次大戦についての再検討が進み、現代世界の始まりとして第一次大戦を評価する研究が発表されつつある。第一次世界大戦に関する研究は活況を呈しており、申請者もキリスト教思想史　に関してその一端を担っているが、思想史分野ではまだ第一次世界大戦の意義に関する再検討が十分に進んでいるとは言い難い。思想史研究の任務として、思想の展開を時代状況との対話として分析することがあるならば、近年の第一次世界大戦研究の成果を受けた新たな研究が求められるだろう。

そこで再検討したいのが、「保守革命」と呼ばれる思想的潮流である。A・モーラーによる研究(A. Mohler[1950, 1972²])以降、「保守革命」という概念は戦間期ドイツの反動的風潮を特徴づける概念として普及している。しかし、その作業を通じて、「保守革命」という概念がモーラーの研究以降拡がりを見せており、現在では非常に曖昧なままに流通している。

その原因は、「保守革命」に関する議論はほとんどの場合、ナチズムとの関係という結果に関心を寄せているため、保守革命的言説がなぜ・どのように広まっていったのかという、「保守革命」という立場の生成に対する関心が低い点にあると思われる。そこで、近年の第一次世界大戦研究の成果を意識しつつ、「保守革命」の生成と隆盛のプロセスを明確化する必要があると考えた。この分析は、第一次世界大戦が後の時 代に与えた影響を明らかにしようとする、現在の第一次世界大戦研究の動向に対しても大きな貢献となるものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、ヴァイマール期ドイツの思想史を特徴づける動向の一つである「保守革命」について、プロテスタンティズムとの積極的な関係を明らかにすることである。

「保守革命」は反プロテスタント的であるという見方が一般的であるが、「ドイツらしさ」を希求した「保守革命」にとって、「宗教改革の国」としてのドイツというアイデンティティを全面的に否定することはできなかった。また、プロテスタントの側でも「保守革命」に呼応して「ドイツ的キリスト教」を構想した神学者たちが存在する。

そこで、本研究では以下の三点を検証する。

1)「保守革命」におけるプロテスタンティズム批判は選択的なものだったのではないか

2)プロテスタント神学者の側でも「保守革命」からの批判に応答/迎合することで「ドイツ的キリスト教」が展開したのではないか

3)両者の密やかな協力関係によって「保守革命」はより大きな影響力を持つことになったのではないか。

３．研究の方法

本研究の目的は、「保守革命」の描いた「ドイツらしさ」のイメージとプロテスタンティズムの 関係を明らかにすることにある。そこで、上記「研究目的」で掲げた 3 つの仮説を検証するために、以下のステップに従い研究を実施する。

1) (予備考察)最も読まれた保守革命的書物である「西洋の没落」に対する神学者の反応を分析し、「保守革命」とプロテスタンティズムの関係について概略を把握する。

2)保守革命論者のプロテスタンティズム評価の特徴を明らかにする。

3)プロテスタント神学思想における保守革命的潮流を整理する。

4)上記 2)と 3)の間にどのような相互関係があるか考察する。

４．研究成果

本研究計画の初年度である 2015 年度は、O・シュペングラーの『西洋の没落』におけるキリスト教の描写および評価と、『西洋の没落』に対するプロテスタント神学者からの反応を分析した。 『西洋の没落』においてキリスト教の歴史はシュペングラーの循環史観と文化類型論によって分断されており、全体的にキリスト教を含めた宗教に対して否定的な評価が下されながらも、イエスやルターといった「英雄」には高い評価を与えていることが確認された。 プロテスタント神学者からのシュペングラー批判としては、1)『西洋の没落』におけるキリスト教についての叙述内容に関わるもの 、2)『西洋の没落』における歴史叙述の基礎概念に関わるもの、の 2 つに整理できることが明らかになった。前者については事実誤認の指摘など、ほぼすべてが否定的なものであるが、後者、それも特に中心的な鍵概念である「運命 Schicksal」概念については賛否両論が確認された。

「運命」概念はキリスト教思想において一定の位置を占めてはきたものの(cf. ヘーゲル)、1910 年代までそれほど主要な概念であったわけではないが。しかし、1910 年代後半から 1920 年代にかけて、この概念に対する注目が急激に高まる。そのことは、RGG の第 1 版(1913) には“Schicksal“に独立した項目が立てられておらず、第 2 版(1931)で初めて項目立てされていることにも現れている。「運命」概念に対する評価としては、ショルツはその意義を否定するが、ハイム、E・ヒルシュ、W・エーレルトらは神学を刷新する積極的な力を認める。このうち、ヒルシュとエーレルトにおいては「運命」概念がナショナリズムおよび民族主義に結びつけられており、シュペングラーに端を発する「運命」概念が神学的に補強されている過程が確認できた。

2016 年度は、O・シュペングラーの『西洋の没落』に由来する「運命」概念をキーワードとして、シュペングラーに代表される保守

革命的言説を当時のプロテスタント神学者たちがどのように受け止めたのかを分析した。すでに前年度までにH・ショルツ、K・ハイム、W・エーレルトについては分析を進めていたが、今年度前半に分析したE・ヒルシュについての分析を加え、以上の研究成果を 2016 年度 9 月に開催された日本宗教学会および日本基督教学会の研究大会にて口頭発表により報告、そこでの質疑応答などから議論をさらに深め、『宗教研究』（日本宗教学会、2017 年）に論文を発表した。。この作業を通じて、シュペングラーのキリスト教理解がA・ハルナックや宗教史学派の神学者たちの研究成果を通俗化したものであったことも確認できた。これは、保守革命論者とプロテスタンティズムの関係を解明しようとする本研究計画にとって重要な知見である。さらに当初の計画以上の成果として、同時代の保守革命的言説の流行をプロテスタント神学者たちが無批判のままに放置している状況をH・ヤーコプゾーンというユダヤ系言語学者が批判していたことを紹介できた。ヤーコプゾーン自身が興味深い人物であるが、同時代の内在的な視点から、保守革命的言説とプロテスタンティズムの密やかな結託に対する警戒が示されていたことを示す貴重な証言である。

2017 年度は、1917 年の宗教改革 400 周年記念において生み出された、ルターに関する言説の分析を進めた。なぜなら、この年には多様な立場によるルター像が提示され、戦争中ということもあり、とりわけドイツ・ナショナリズムとルターの関係が問われることになったからである。それゆえ、「ドイツらしさ」とプロテスタンティズムの関係を考察しようとする本研究課題にとって、宗教改革 400 周年記念は格好の分析対象となった。この研究成果は、2017 年度 9 月の日本基督教学会にて口頭発表を行い、そこでの質疑応答などから議論をさらに深め、『基督教学研究』（京都大学基督教学会、2017 年）に論文を発表した。その概要は以下の通りである。

1917 年は第一次世界大戦の開戦から 4 年目を迎え、ドイツ社会の疲弊が深まっている時期であった。それゆえ、宗教改革 400 周年を盛大に、それも国際的な祝祭として祝うことは不可能であった。そういうわけで、ハイライトとなるような祝賀祭は行われなかった 1917 年であるが、その代わりに宗教改革やルターに関する著作物が大量に刊行された。このような、大学人を中心として生み出されたルター言説において支配的だったのが、戦意高揚のための「ドイツ的ルター」の像であった。しかしながら、ナショナリスティックなルター像を提示する主流派に同調しない立場も存在した。宗教改革 400 周年記念は、ルターをドイツ性の観点から理解する、当時のルター派教会の公式見解に対する批判的な態度決定を促したのである。この意味で、宗教改革 400 周年記念は神学的リベラリズムの試金石となった。ただし、「ドイツ的ルター」への反対が、戦争への反対を意味するわけではなかったということも指摘されるべきである。ラーデは 1917 年の時点で明確に戦争の終結を訴えていたが、トレルチには戦争の継続を容認するような発言も確認できる。さらに、ホルはラーデやトレルチから距離をとり、戦争の継続を支持する側に立っていた。

「ドイツ的ルター」の称揚に反対する神学者たちが注目したのは、ルターの宗教性であった。その関心は、当時のドイツの宗教状況に対する問題意識に根ざしている。「ドイツ的ルター」という見方に反対する神学者の一人であったトレルチは、「教会外の宗教（die außerkirchliche Religion）」に注目する必要性を説く。「教会外の宗教」は近代ドイツ社会の宗教問題の解決ではなく、問題そのものであったが、それは現状のキリスト教会よりも重大な問題であった。宗教改革 400 周年記念はそのことをはっきりと認識させる契機となった。

宗教改革 400 周年のドイツにおいて「教会外の宗教」の重要性が高まっていたのなら、「教会外の宗教」が宗教改革 400 周年をどのように迎えたのかは注目に値する。そこで、編集者ディーデリヒスの下で「教会外の宗教」を求める運動を展開していた雑誌『タート』（*Die Tat*）を見ることとした。ディーデリヒス自身をはじめ、『タート』に集まった、あるいはディーデリヒスによって集められた著述家たちには保守革命を求める者が多かった。しかしそれ以外には、宗教的立場や関心は様々であり、そこに統一的なルター理解や宗教改革評価を見出すことは難しい。それでも基本的な方向性としては、（１）教会批判者としてのルター理解、（２）ルターにおける生の宗教性の発見の重要性、（３）（時にゲルマン性と結びつく）知識人宗教としての新たな宗教運動の必要性、といった内容を取り出すことができる。保守的ルター派の称揚する「ドイツ的ルター」に対してルターの内面的な宗教性に注目するという、『タート』の寄稿者たちに認められる発想は、リベラルな神学者たちと共通するものであった。

この時期にディーデリヒスからラーデへと送られた手紙を読むと、彼らは共通の問題に取り組んでいるとお互いに認識していたことが伺える。帝国と一体化したドイツ・プロテスタンティズムによって定式化されたルター像への批判は、保守的ルター派に対して距離をとるプロテスタント神学者たちの内部だけではなく、「教会外の宗教」とも共有されていたのである。宗教改革 400 周年記念は、ルターをドイツの英雄として祭り上げる言説を大量に生み出した裏側で、プロテスタンティズムと、保守革命的な「教会外の宗教」とを接近させるという側面も持っていたのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① 小柳敦史、宗教改革記念 400 周年記念再考、『基督教学研究』、査読無、37 巻、2017 年、印刷中。

② 小柳敦史、キリスト教と「運命」-プロテスタント神学における『西洋の没落』の残響-、査読有、390 巻、2017 年、1-24 頁、DOI: https://doi.org/10.20716/rsjars.91.3_1

〔学会発表〕（計　３件）

① 小柳敦史、宗教改革 400 周年記念再考、日本基督教学会第 65 回学術大会、2017 年。

② 小柳敦史、ヴァイマール期のプロテスタンティズムにおける運命概念、日本基督教学会第 64 回学術大会、2016 年。

③ 小柳敦史、プロテスタント神学にとっての『西洋の没落』、日本宗教学会第 75 回学術大会、2016 年。

６．研究組織
(1) 研究代表者
小柳　敦史（KOYANAGI, Atsushi）
北海学園大学・人文学部・准教授
研究者番号：60635308